

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 マヌエル・アスアヘアラモ

マヌエル・アスアヘ・アラモ氏の博士論文「彼方の海岸——20世紀と21世紀のラテンアメリカ文学者らによる、日本古典文学の翻訳とその時代背景」は、20世紀初頭から現代にかけてのラテンアメリカの各地・各時代を代表する作家たちが残した日本旅行記、日本の古典文学作品翻訳、日本を題材にした作品を取り上げ、それらが生成するダイナミズムを他のテキストや言説との関係の中に捉えた上で、文化資本として蓄積したこれらのテキストが彼の地における日本をめぐる言説を形成する過程を論じたものである。前提とする理論には世界文学論と翻訳研究があり、単なるラテンアメリカと日本の文学上の関係の叙述や翻訳の比較分析に留まることのない、博士論文の名にふさわしい重厚な論考である。

そもそも対象地域の言語・文化圏内の自生的なテキストの研究にのみ囚われがちな外国文学研究にあって、ましてやその関係が希薄と思われがちなラテンアメリカにおける日本および日本文学という事象の存在を読み取る研究は、日本語による成果としてもまれであり、貴重なものである。その希少性をひとりで挽回するかのように、16世紀の宣教師フランシスコ・ザビエルによる日本滞在中の記録をスペイン語圏文化内に日本をマッピングしたテキストだとするとところから出発するアスアヘ・アラモ氏の論文は、扱っている対象も広範である。ニカラグアの20世紀初頭の作家エンリケ・ゴメス=カリージョの日本滞在記、アルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘス、メキシコのオクタビオ・パス、ブラジルのアロウド・ジ・カンポスという三大国を代表する詩人・作家による日本文学作品の翻訳をひとつの論文内で論じた事例は初めてであろう。日本においては、言語の問題もあり、「ラテンアメリカ」と称しながらも、実際のところはほとんどはスペイン語圏ラテンアメリカ(イヌパノアメリカ)のみを扱い、あたかもブラジルは独立した別地域のようにみなすか、言い訳程度に参照する研究者が多数である。これに対して第一言語スペイン語はもちろんのこと、英語、日本語に加えてポルトガル語も堪能な自身の特長を活かし、ブラジルも含む包括的な研究を行ったアスアヘ・アラモ氏の論文は、その点でも貴重である。

審査では、ザビエルを扱った出発点が新鮮な驚きであるとの意見と同時に、まさにその出発点から20世紀に時代が飛ぶのは唐突ではとの疑念も呈された。また、最終部で扱った、日本を題材に取り上げた若い作家たちは、それ以前の大家たちに比肩しうのかとの疑問もあったが、アスアヘ・アラモ氏は、彼らは近年、批評家や学者によって大いに論じられており、将来、パス、ボルヘスらと同列にカノン化されるであろうと応じた。

以上のような議論もふまつつも、その壮大なスケールとそれを支える論理の堅実さにおいて、本論が博士(文学)の称号を授与するにふさわしいものであることには異論の余地はないという点で全員の意見が一致した。